

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-01-10

リチャード・コックス日記(Diary of Richard Cocks)試訳(4)1616年6月から7月まで

森, 睦彦 / MORI, Mutsuhiko / TAKEDA, Mariko / 武田, 万里子

(出版者 / Publisher)

法政大学史学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政史学 / 法政史学

(巻 / Volume)

24

(開始ページ / Start Page)

69

(終了ページ / End Page)

84

(発行年 / Year)

1972-03-30

リチャード・コックス日記 Diary of Richard Cocks 試訳(四)

— 一六一六年六月から七月まで —

武田 万里子
森 睦彦六月二日 (元和五年四月二十八日)
(新曆六月二日)⁽¹⁾ 雪ノ浦発五月晦日付でニールソン君からの手紙を受け取った。

内容は、彼が肥後から番衆の帰るのを待っていること、イートン君の待遇が今までよりよくなったこと、イートン君を非常にきびしく扱った番衆がその地位を剝奪され、我々の下僕の首を切ったかどで自分の首も飛びそうになっていることなどであった。

オランダ人は今日新しい倉庫の棟上げを行なった。彼らのもう一つの倉庫と同じほど大きい。また彼らは、一マイル離れて別のわらぶき屋根のを、船を造ったり材木を入れたりするために建てた。その他にも今年は多くの建物を建て、果樹園を二ヶ所こしらえ、海には新しい埠頭を作った。

六月三日

先の手紙を運んだ男に託してニールソン君に手紙を出し、⁽²⁾ ほかでもなく、幕府へ事の次第を報じるために使者を出した大村の人々が事を遅延させているのだから、早く戻った方がよいと私は思

うが、もし十分な理由があつて残るのならゴレンサノを戻してほしいと書いた。

仕立屋たちと勘定を計算し、太った仕立屋に新しい服五着の仕立てと古い長上衣二着、繻子のダブレット⁽³⁾一着の縫い賃として小粒五〇匁を支払った。彼はその中から、彼に売ったダテ⁽⁴⁾イー布二反の代として大きめの銀二〇匁を私にくれた。

シナ人のボタン作りにボタンの代として小粒一四匁を支払った。

やせた仕立屋とも勘定を計算し、伝票に見える通り、数着の服の仕立てと古い服の直し代として

カフロの服上下三着 一八匁

旗の仕立代 二匁

以上を支払った。

六月五日

駿河発一八日前の日付で平戸侯肥前守(松浦隆信)⁽⁵⁾からの手紙と贈り物の鮭三尾とを受け取った。彼は、大御所様からねんごろな

もてなしにあづかり、帰りたい時に平戸へ帰ってよいという許可を受け、また着物一八着と鶴すなわち塩漬けの鳥一八羽を拝領したが、これは日本では名譽な事なのだと書いてきた。

また虎右衛門殿から挨拶状一通と、同封の支那甲必丹(李旦)あての一通も受け取り、支那甲必丹へは直ちにそれを渡した。虎右衛門殿は藩主の拝領の品について報じていた。

午餐のあとでニールソン君がイートン君および肥後へ行った平戸の番衆とともに雪ノ浦から帰って来た。またイートン君の長崎の常宿の主人も一緒だったが、彼はイートン君が難儀していると聞くとただちに雪ノ浦に彼を尋ね、それ以後行動を共にし、肥後の連中が乱暴を働くような場合に備えて、彼を守るためにムスケツト銃その他の武器を牢へ運び込み、必要とあらば死に至るまで一命を賭して彼を守ろうとしたのだった。

肥後へ行った番衆が戻って、大村の人々に次のような返事をもたらしした。すなわち、大村の人々はくだんの英国人を自由にしなければならぬ、なぜなら、彼は大御所様の被護下にあるのだから彼らと事をおこす意志はなかったらうし、またこの騒ぎをおこした肥後の人々は彼に何も知らせずし事を運んだのだから、彼としては彼らの行動について弁護するわけはない、ということであった。しかし、これらのすべてにもかかわらず、大村の人々は談合すなわち会議の席についてたまま事を遅延させ、最後まで彼を閉じ込めておき、知らせが来たら二日後まで彼を渡そうとしなかつた。また別の番衆は最初イートン君を親切に扱い、ニールソン君を面会させたりしたが、あとになると彼を押しとどめ、二日

の間イートン君と話すのを許さなかつた。

大村の人々の我々に対する憎しみは伴天連すなわち司祭のせいである。彼らは大村の人々を扇動して我々が日本人に嫌われるように仕向けたのである。なぜなら、くだんの人々のすべて、あるいは大部分は大村におけるカトリック教徒で、多くのカトリック教徒やイエズス会士は今日まで日本では大抵の場所にひそかに潜伏していたのだが、彼らの日本からの追放の最大の(あるいは主要な)原因を英国人に帰しているためである。しかし私は、今彼らが我々に見せてくれたのと同様の友情をいざれ彼らにも返したいと思つている。また大村の人々と平戸の人々とが敵対關係にあることは確かだ、これは法印様(松浦鎮信)が父道可様(松浦隆信)の代に大村方に取られた領土を多分に奪い返し、その上に大村領の土地も手に入れ、平戸の人々は今に至るまでそれを領有しているという事情があるためである。

六月六日

(6) 都発先月二二日付のウィッカム君の手紙一通と通訳コー・ジョンからの一通が、酒二樽計一三匁、マティンガへの帷子二枚、彼の女ふみ女への二枚、イートン君の女への一枚とともに呉服商の手で届けられたのを受け取つた。彼の手紙によれば薩摩侯(島津家久)は福島大夫(福島正則)その他の大名たちと都へ来ており、他の大名はみな帰国を許された由である。

六月七日

(9) イートン君の宿主はピーコック君が殺された際交趾にいた次第を私に語り、また交趾の王は事の次第を何も知らないから、我々

が求めれば全部の賠償が得られるのではないかと思ふとも言つた。彼の言葉によれば英国人とオランダ人を殺害したのは五人で、二人は交趾の人間、二人は日本人、他の一人はシナ人で、その名前は、日本人は孫左殿と三蔵殿、そのうち孫左はピーコック君の宿主、シナ人はホンゴといい、交趾の人間はジャンクの番衆の温官と帆船の番衆のアミであった。

私は彼に、もし長崎において、彼が回収あるいは受領するものすべての勘定を東印度会社に納めることに責任を持つと充分に私に保証してくれるなら、この件に従事する権限を彼に与えし、それについて充分に彼の満足のゆくようにしなければならぬが、もし必要なら大御所様から交趾王にあてた書状も発行していただく、と申し入れた。すると彼は私の満足のゆくようにすることを請け合ふと返事した。イートン君に対しての骨折りと同時に交趾の件に彼を雇う希望もあつて、彼に贈り物をした。

六月八日 (元和二年五月五日)
(新暦六月一八日)

今日は日本流で第五の月の第五日にあたり、日本の祭日で五月御霊会ごりょうえと呼ばれる。

支那甲必丹はこの日本の祭日の贈り物として酒を小徳利に二本と魚二尾をくれ、シナ人の太った仕立屋とボタン作りも酒徳利一本と魚二尾をくれた。私も支那甲必丹に鮭一尾と扇子一本を贈つた。

私が聞いたところでは、平戸侯は大御所様と話したのではなく、とある部屋に入ることを許されただけで、そこでは人々が、

大御所様は紙でおおわれた狭い部屋に病気で寝ておられると語り、側近の上野殿(本多正純)がその中へ入って、平戸の殿が伺候している旨を告げ、再び出て来て、平戸侯に向つて、大御所様はそれを感謝なさり、帰国の許可を与えて下さつた、と告げたのだそうだ。しかし人々は実際は大御所様は亡くなつたがそれを隠しているのだと思つている。だがこれは、誰かが武力蜂起するのではないかと見るための政略だろう。

六月九日

商館の前で鰻を突くやすを試してみた。生きた鰻六五匹を得た。

イートン君はボーイのコー・ジョンの父親に、彼の衣類と脇差に銀五匁を添えて与えた。

六月一日

クシユクロン殿とトメー殿から敷石を積んだ船二隻を引き取つた。しかしオランダ人は平戸侯からくだんの島と、結果的にはこの石も与えられていると称して、我々が受け取るのに異議をとなえた。

ニールソン君は今日私とはげしい口論になり、以前何度もそうだったように私を罵倒した。彼のいつもの酒ぐせの悪さを私は今までがまんしつづけたし、今でもがまんしている。

六月二日

新暦で今月一二日付、つまり一〇日前の日付のジュールジュ・ドゥロイスの手紙と、同一日付の覚え書きを受け取つた。その両方には大御所様が死去したという知らせが確実なものとして伝わ

っていることや、その他の日本の風説が書いてあった。またもしできれば彼の黒人つまり奴隷を返してほしいとも書いてあった。

シナ人が二人私を訪れ、シナ酒を一瓶贈ってくれた。

六月一二日 (一三日の誤記か)

秀頼様が生存して内裏に保護されており、大御所様が死去したので今やその事実が明らかにされ、彼がやがて將軍になり大坂の彼の城は再建されるといううわさがある。だが私は実際これは偽報であると思う。

六月一四日

今夜半藩主の許から急使が来て、彼は現在ここから三〇里ばかりの博多の港の一つ、相ノ島⁽¹²⁾におり、今夜か明朝平戸へ帰る予定であると伝えた。そこで、総右衛門殿(南)や他の侍たちは彼を出迎えに出かけた、というより逆風だったので彼の居る場所まで出かけた。

六月一六日

平戸侯は真夜中ごろ平戸に到着し、オランダ人は彼が商館のあたりを通過する際何発か礼砲を打った。

私は大炊殿の所へ通訳を行かせ、藩主が御健勝で無事帰国された事をお喜びしているが、もしおひまなら御手に接吻するためにうかがいたいと大炊殿から伝えていただきたいと述べさせた。そして、通訳が大炊殿と話している時、藩主は幸運にも、あるいはわざわざそこを通りかかり、通訳にねんごろな言葉を与え、いつでも私が来てくれればうれしいとの伝言であった。

太右衛門殿は我々、つまり英国人全部を正饗に招いてくれた。彼は我々の大工頭で、仕事がほぼ済んだからである。

私は通訳を主馬殿(佐川)と内匠殿(松浦)の所へもやって帰国を祝し、おひまな時にうかがいたいと言わせた。

主馬殿は私に伝言をよこし、大御所様が二六日前に死去したことは確実で、彼はその埋葬の場所も見だし、また將軍様も人々がその死を確かめるようにわざわざそうしたのだと言った。各々の大名たちに分けあたえられた下賜品は故大御所様の形見であり、大判、衣服ともに大層なものだったという。また將軍様は過去における大名たちの労苦に対する報酬として彼らを休養させるため、三年間彼の許へ戻らずに国に滞まることを許した。しかし、この三年間に大御所様の息子に対して謀反が起きたなら、大御所様は直ちにまた出現するだろうと心底から私は信じる。

権六殿(長谷川)は昨夜奉行としてここを通過して長崎へ向った。このことによって私は自分の考えに一層確信を持った。

六月一七日

我々の新倉庫の西側の土が大雨で沈下し、果樹園の堀が三区画くずれ落ちて数本の果樹をいため、堀の残りの部分は土が崩れたためぐらぐらになり、今にもくずれそうになった。

我々は全員そろって平戸侯を訪問した。すなわち、イートン君、ニールソン君、オスタウイック君、それに私である。酒二樽、するめ及び干えびをそれ／＼一〇連つづ計二〇連、オレンジの花の砂糖漬けの小壺一個を贈り物に持参した。藩主は叔父の豊後様(松浦信実)、大村の主膳殿の父親、二人の坊さん及び唐津

からの使者を従がえていた。彼は我々の訪問と贈り物をよろこんで受け、必要なものは何でも与えようと言ってくれた。そこで私は、今から数日後、殿が旅の疲れをいやされたあとで再び御前にかがいがい、いくつかの事柄をお耳に入れて、それらにつき御相談にあづかることを許していただきたいと述べた。

誰かが贈ったものらしく藩主は平たい葉壺を手に持ち、その叔父も別のを持っていた。彼が私に、こういう品はお前の国にあるかとたづねたので、あると答えた。藩主は、もし船で来るものがあつたら、自分のためにとつておいてほしいと望んだ。英国商館に戻つてみると、偶然ニールソン君が同じようなのを一個持っていたが、別の彩色がほどこされていた。私はそれを藩主の許へ送り、藩主はこころよく納めてくれた。

六月一八日

主馬殿と内匠殿を訪問し、各々に酒を小徳利に二本と乾魚を一〇連、これは各々へ五連づつ、を持参した。彼らは、老大御所様は二八日前に死去し、秀頼様も死去したので、その子の將軍様に對してだれもが事を荒立てずにいると語つた。

床についたあとで安右衛門殿が、平戸の沿岸でここから三里ばかりの島の近くに船あるいはジャンクがいることを聞いたので、オランダ人にもこれを知らせたと伝言をよこした。

六月一九日

支那甲必丹は、前の晩長崎から来た人々がいづれかの船あるいはジャンクから二発の砲があがるのを聞いていることを知つたと私に語つたので、キャプテン・スペックスの所へ通訳ゴレサノに

手紙をもたせて知らせた。彼は、同様の報告を彼自身も受けたので、本当かどうか人をやうて聞いてこさせたが、そのような事については何も聞けなかつた、という返事をよこした。そのすぐあと別の人間が、砲が三発あがつたのを聞いたと知らせてきた。そこで私は六丁鑓の舟を出して、沿岸に船が見えるかどうか調べさせた。しかし空が暗く雨がひどくて何も見えなかつたので、一行はすぐ帰つて来た。

キャプテン・スペックスは、大御所様の死去の報によつて何か變動がおこるかもしれないから、日本の情勢について私と話し合いたいと言つた。

ジャンクはシナのもつとわかつた。平戸へは寄港せず博多へ行くもので、小さなソマというかジャンクであつた。

平戸侯は支那甲必丹の弟(華字)が私にくれた金魚二尾を所望する使いをよこした。私は大いに不本意だったが、前に彼の弟(松浦信辰)に別のを贈つたこともあるので、これを手放した。

六月二〇日

平戸侯は日本の帷子二枚をもたせて側近をよこし、天候の悪いのを主な理由にして、大御所様の城から歸つて以来まだ私をたづねていなかつたことなどあれこれ世辭まじりに伝えさせた。その側近はまた私に錫の茶椀一個をくれた。

私は通訳をやつて藩主に贈り物の礼を言わせ、また、そのような贈り物をお送りいただく光栄に自分は値しない人間と思つていと伝えた。彼は返事をよこし、私はより多くのものに値する人間で、贈り物がささやかなのではずかしく思うが、こんな品でも

快く受けてほしい、と言ってきた。

六月二日

夜にかけて、平戸の沿岸四里か五里のところに着船がジャンクが見えるという知らせが来た。そこで、支那甲必丹は舟で出かけ、コックのジョン・コロラが同行した。

真夜中ごろ一人の英国人が商人ジョン・ペイリー君の手紙と、⁽¹³⁾ トーマス号の船長リチャード・ロウ君の手紙を持ってやって来た。船は去る一月二〇日バンタムを出てモルッカ諸島経由で来航し、平戸から五里以内の所に到着しているようだ。

私はトーマス号に乗船した。同船を曳く舟は平戸から連れて行った。昼ごろ船は港へ入り、オランダ商館のあたりを通った際三発の礼砲があがった。錨をおろした時、町に対して一一発打った。オランダの甲必丹、ヤコブ・スベックスは入港するより前に乗船して、酒二樽、豚二頭、鯨一尾を贈り物に持って来た。彼の下船に際して礼砲三発を打った。オランダ人は我々の通過の際と彼の下船の際数発の砲を返礼として打った。

六月二三日

藩主は新しい將軍(徳川秀忠)に贈ろうとして、どのような品々が船で着いたか目録がほしいと使者をよこした。そこでそれを彼に送った。また我々は、許可なく日本人が乗船するのを禁ずる旨の、船に掲げる禁令を藩主から出してもらった。これは日本人の悪習である盗みと船員をだますくせを防ぐためである。

平戸侯は大御所様用となるはずだった鳥銃八丁を返してよこした。大御所様がごくなつたので、左兵衛殿(長谷川)が戻したの

である。

六月二四日

平戸侯の家来に託して別の手紙をウィッカム君に出した。その家来は新將軍の許へ英船の到着と船載品目を知らせる書面をたづなえて行くところであった。

六月二五日

主馬殿その他の人々が藩主の所から我々の葉壺を見に来て、藩主に見せるため、それらのいくつかと水差しとポタージュ皿も持って行った。

この日の午後⁽¹⁵⁾シナの小ジャンクが入港した。大坂から来たもので、日本へは去年来たのである。

六月二三日

藩主はこの日かさねて送った葉壺数種、ミルク酒ポット、水差しを買い、主馬殿も葉壺二個と緑のかゆ皿一〇枚を買った。助右衛門殿が買った葉壺二、三個は壊れていたが、彼が藩主のために別に一個手に入れに來たので、壊れないものを一個彼に贈った。手渡す際の不注意で銅鉄の棒が一束船から落ちた。

六月二七日

アルバロ・ムニョース、⁽¹⁶⁾「片眼の旗手」、バスクアル・ベニテスが今日長崎から平戸へ来て英国商館に私をたずねた。彼らが来たのはモルッカ諸島やスラットでどのような事があったかを知るためと思われるが、本当のことは彼らには話したくなかった。アルバロは私に二本の飾り袴と袖飾り、およびラスク三巻を贈り物にくれ、「片眼の旗手」は砂糖漬け一壺をくれた。

六月二八日

肥後と平戸の男たち二人が今日口論のあげくたがいになり合つた。

六月二九日

肥後藩主(加藤忠広)が吉ノ浦に人をやつて、イートン君と騒動を起した男を斬罪に処した事を私は知った。主膳殿(松浦重賀)は果物を贈り物に届け、英国商館にたづねて来た。

藩主の船大工弥右衛門殿(山崎)に、製作の見本として滑車を四個貸した。

六月三日

藩主から伝言があつて、薩摩の重臣が平戸へ来ており、彼は英国商館と英船に來たいと望んでいるが、重要な人物であるから丁寧にもてなしてほしいということだった。私は言われたとおり商館を見せて軽食を出し、船上でも同様にして、別れの際には礼砲を五発打った。

アルパロ・ムニョースとヒル・デ・ラ・バレダ、「旗手」の各々に油を一ガロン入りの瓶に一本とスペイン酒を一クオート入りの瓶に一本、ガラス瓶ごと贈り物として届けた。

薩摩の重臣は葉壺、水差し、水のみ、かゆ皿、鏡、⁽¹⁷⁾ テーブル・ブック、ブランポット更紗、飾り腰帯などに見本と価格表とを取りに使者をよこした。

七月一日(元和二年五月二七日)

(新暦七月一日)

考慮の上、次の品を薩摩の重臣二人へ贈り物とすることにしました。彼らが藩主の親類で、薩摩では高位の人々であることがわか

つたからである。

鏡二個、一個は四角、一個は八角

テーブル・ブック二対

平型葉壺二個、六斤

平型葉壺二個、四斤

平型葉壺二個、一斤

背高葉壺二個、六斤

〃〃〃〃 四斤

〃〃〃〃 二斤

綠色水差し二個

〃 ミルク酒ポット二個

〃 水のみ二個

⁽¹⁸⁾ 飾り腰帯 シングル四本

ブランポット更紗 シングル二反

これらの贈り物を彼らは喜んで受け取り、イートン君にこづけて、もし我々が薩摩侯と取り引きする事があれば、彼らが何かと助力できる人間であることがわかるだろうし、英国商館と船上での欲待は忘れはしない、また、今まで見たこともないような品々を贈られればなおさらのことで、それゆえ彼らの主君薩摩侯にこれらの次第を話さずにおくわけにはゆかない、との返事をくれた。そしてそのすぐあと、二人の家臣をよこして謝意を表し、彼らの各々から、日本式の、食事を共にする五人分の木皿や鉢その他をつけた重箱を贈られた。

ロウ君は葡萄酒一樽、砂糖漬けのナツメグ一壺、砂糖漬けの生

姜少々を贈り物に持ってオランダ商館を訪問し、親切なもてなしを受けた。

ドミンゴは私が英国外にいる間の五年間、年季奉公をつとめることになり、食事と衣服を支給し、その他は適宜私を与えることに話が決った。

七月二日

薩摩の侍たちが緑色の水のみ二〇個と緑色のかゆ皿二〇枚を買いに人をよこした。私は一個六匁の値をつけた。だが彼らは代金を支払わず、品物を返した。

藩主の家来の侍の一人が贈り物に子牛を一頭くれた。

アルバロ・ムニース、「旗手」、イートン君らはトーマス号に乗船し、一同が帰る時三発の砲を打った。

七月三日

ピランゴ・ルイスのジャンクがマニラから長崎に到着し、ミゲル・デ・サリナスが乗って来たという知らせを受けた。彼らの報告によれば、⁽¹⁹⁾ドン・フワン・デ・シルバはマラッカを眼前にして死去し、その艦隊はマニラへ戻ったが、彼はまずアチンのモール人とオランダの軍勢とをマラッカから追い出したという。

また別の日本のジャンクがマニラから長崎へ入港し、⁽²⁰⁾船頭は弥三右衛門殿だという知らせも受けた。

贈り物を持って我々は平戸侯の許へ出かけた。

七月四日

一同の賛意を得て支那甲必丹の弟キャプテン・華宇へ贈り物を送った。

虎左衛門殿は女物の帯一本、足袋一足を私にくれた。
主殿様（松浦信辰）へも進物を届けた。

七月六日

支那甲必丹アンドレア・ディティスへ贈り物を届けた。総右衛門殿（南）と虎左衛門殿へも贈り物をした。

薩摩から来た平戸の貴人、つまり法印様（松浦鎮信）の親類が英国商館に来て、贈り物に酒二樽と魚二尾をくれた。彼の言葉によると、薩摩侯は評定の結果琉球その他彼の全領土内での自由な交易を我々に許すことに決めた由である。しかし先日ここへ来た重臣の二人は、藩主からの命令もないので私にそこまで語ろうとはしなかったが、それが事実であることを彼に請け合ったという。

七月七日

長崎からキャプテン・華宇の手紙を受け取った。彼は贈り物の礼を言うと共に、⁽²¹⁾高砂つまりフォオモサ島に行くはずだった等安の船三隻が戻って来たが、それらは同島へ行ったのではなく、むしろシナの沿岸で略奪を働いたと言った方がよく、その地で一行はジャンクを一隻捕獲し、人々が屈せずに抗戦したので全員を死に至らしめたことを知らせて来た。

彼はまた見えてに、この一〇日から一二日の間は私が都へ行かないように、もし行くなら、有馬の岸辺には海賊を働く悪党がいるという報告があり、また薩摩侯は、生存しているといわれる秀頼様のために新將軍に戦争をしかけるつもりで、まず長崎から始めるといううわさもあることから、よく備えをして行けと私に

知らせるようにと書いてきた。これは今日一般に伝えられている
うわさである。

等安の家来の舟の一隻が高砂の奥地ををきわめようとして、と
ある入江に入ったところが、それと気づくより前に土民に襲撃さ
れ、逃げられないとわかると、敵の手におちいるよりはと自ら腹
を切ったといううわさがある。

七月八日

新曆七月一六日付のジョルジュ・ドゥロイスからのと同一七日
付のアルバロ・ムニョースからの手紙、及び贈り物の青絹靴下一
足とニッパ酒一壺を受け取った。イートン君とロウ君へもそれ
ぞれニッパ酒一壺が届いた。手紙には、ポルトガル人はマラッカ
にゴアからの四隻のガレオン船をむかえたが、一隻はアチン王が
ガレー船が焼き、別の三隻はそのあとオランダ船が焼いてしま
い、それはドン・フワン・デ・シルバがマラッカへ到着する前の
ことで、その後一行は彼の到着より前にモルッカ諸島へ引き揚
げ、彼は間に合わなかったため悲嘆にくれて死んだ、というスベ
イン人とポルトガル人の知らせが書いてあった。

七月九日

藩主は乳の出る雌やぎ一頭と子やぎ一頭をベイリー君に贈っ
た。彼が病気だったので乳を取るためである。

七月一〇日

イートン君と通訳を藩主の許へ行かせ、商品を中央へ運ぶため
大型の船を入手したく、またオランダ人のように我々も前からの
番衆を頼みたく、今までのように毎年新しい人に交代してもら

「リチャード・コックス日記」試訳(四)(武田・森)

いたくはないので、前からの番衆を同行させていたきたいと願
わせた。藩主は、数日中に自分で將軍の許へ行くため、一番大き
な船が現在入用であるが、しかし一隻の良い船、それも一番小さ
いのではないものを貸し与えよう、また前からの番衆について
は、彼にある任務を与えてあるので手放すことはできないが、そ
の他の者なら誰でも選んで、よければ今後その者一人に決めても
よい、という返事をくれた。イートン君は、藩主は重臣全員と共
に武器を調べているところだったと言った。遠からぬうち日本に
騒動が起るのではないかと思われる。神よ事態がすべて好転しま
すように。

スペイン人バスクアルが長崎から戻り、ドイツ人クリストフェ
ルとレアレスという名の老兵が一緒だった。彼らは、二隻のシナ
のジャンクがフィリピンのカガヤンから到着し、ポルトガル人が
荷積みした別のシナのジャンク二隻がカンボジアから来ていると
言った。夜おそく別のスペイン人と共に水先案内人が到着した。

七月一二日

夜になるとザンザバー、別名安右衛門殿が平戸から一里ばかり
の河内浦の停泊地に英船かオランダ船が投錨したと伝言をよこし
た。そこでどの船が来たのか舟を出して見に行かせたところ、
英船アドバイス号で、船長の名はジョン・トットンであることが
わかった。私は一同へ豚一頭と酒一樽を送った。事務長あるいは
商人であるエドモンド・ウィルモット君が上陸して数通の手紙を
届けた。すなわち

本社からの一通、他の手紙と組になるもの。

キャプテン・ジョン・ジャーデンから二通、重複分、一通はヤカトラ発一六一五年一月二日付の、トーマス号で送られたもの、写し、他は一六一六年五月二九日付バンタム発のアドバイス号で送られたもの。

キャプテン・ジャーデンからもう一通、重複分。即ちオジアンダー号で送られた一通の写し、及びバンタム出帆のアドバイス号で送られた一六一五年八月一〇日付の一通。同船はモンスーンの時期をのがし、バンタムに戻ったのである。

バンタム発一六一六年五月二五日付キャプテン・コピンドールからの一通。

バンタム発同年五月二三日付ディエゴ・フェルナンデスからの一通。

私は金細工師に良銀三五匁八分を渡して、劍の吊具の止め金と、劍と短劍のこじりを作らせた。また私の古い帯の止め金と締め具を計ったところ一五匁二分あった。金細工師は私に劍と短劍のこじり二個を持って来たが、銀製で正味九匁一分あった。

七月二三日

私は河内浦のアドバイス号へ行き、それが平戸の停泊地へ無事に曳航されるのを見届けた。町へ挨拶のため礼砲七発、番衆たちが立ち去る際に三発、我々の上陸の際に五発を打ち、我々が船に初めて乗った際にも三発打った。トーマス号も歓迎のため陸から三発打った。同船の大砲が陸にあげてあったからである。私は次の手紙を受け取った。

トーマス・スミス卿から二通。一通は一六一四年一月二四日

付、他は一六一五年四月二五日付。

本社から一通。数通の写しあり。我々全員あてに同封で一通。キャプテン・ジョン・セーリスから一通。一六一四年一月二四日付。

ジョージ・セーリス君から一通。一六一四年一月二〇日付。
フランシス・サドラー君から一通。一六一四年一月二五日付。
トーマス・フェラーズ君から一通。一六一三年二月一八日付。
弟ウォルター・コックスから五通。

以上は全部ロンドン発。

ジョン・ガーネイ君から一通。一六一六年五月三〇日付。

ジョン・ハント君から一通。同五月二七日付。

フアン・デ・リエバナから一通。同六月五日付。

キャプテン・ブルーワーから一通。一六一五年八月二日付。

以上は全部バンタム発。

ジョン・フェリーズから一通。一六一五年一月二四日シヤム河のアドバイス号より。

七月一日

帆船ヤカトラ号が今朝河内浦に着き、別のオランダ大船がヤカトラ号より四日前にパタニを出帆したという知らせをもたらした。今、ヤカトラ号ともう一隻のオランダ大船の到着の報が入った。しかしまだいづれも入港していない。

七月一日

広布羅紗七包およびその他の商品、すなわち、ロシア革四捆、金唐革一箱、葉壺三箱、水差し一箱、ガラス瓶二箱、瓶八箱、うち

一箱は麩耐入り、毛皮二箱、キヤラコ等一箱、珊瑚一箱、竜涎香一箱、鷹狩用の獲物袋トランク一個、いたんで値打ちがなくなつた喜望峰からの薬用の根一箱などを陸揚げして受け取つた。

二隻のオランダ船が平戸から一里の河内浦の港に入ったという知らせが来た。

藩主は明日の正餐に我々を招待してくれた。嬉しくはあるが私は遠慮したいところだった。しかしそれができない。藩主の弟が英国商館に私を尋ねて来た。

七月一六日

世助に次の品の精算をした。

金細工師への支払い	一匁二分
古い長上着一着の染め代	一匁三分
ボーイのドミンゴへ	五匁
ドミンゴのすげ笠	二分
イートン君のボーイの父親へ	五匁
私の帽子の修理代	二匁
ドミンゴの帷子	九匁五分
私の刀の研ぎ代	二匁五分
計	二六匁七分

日傘代

デイック・キングの靴二足

計

三匁七分

我々は藩主の正餐に招かれ、ねんごろなもてなしを受けた。支

那甲必丹が一緒で、ロウ君、トットン君、ウィルモット君、トー

「リチャード・コックス日記」試訳(四)(武田・森)

マス号の事務長、イートン君、ニールソン君、それに私が出席した。午後二隻のオランダ船が平戸の停泊地に入った。一隻はズワルテ・レーウ号といい七、八〇〇トンの船、他は帆船ヤカトラ号である。

オランダ人によるとドイツのハンザ同盟市すべてと⁽²⁶⁾デンマーク王、スエーデン王は英国と同盟を結んだ由である。

七月一七日

アドバイス号の乗員で砲手のトーマス・ヒースという者が逃亡したが、平戸侯の役人の手で取り押えられ、その旨私に伝言があった。

我々は次の進物を藩主に届けた。

黄褐色広巾羅紗	四間
金唐革	大型一枚
二番の上質キヤラコ	一反
兔皮	黒色
一本ニベンスのナイフ	一〇丁
瓶	一箱
櫛箱と鏡	一個
鷹狩用獲物袋	
鋼鉄塊	二五斤
大英帝国地図	一枚
議會における国王の図	一枚
⁽²⁷⁾ ブルート王出自の全王の系図	一枚
蓋つきオランダ水差し	三個

大村の人々から加えられた暴行について会議を開いた。藩主は贈り物を喜び、出来るだけ助力しようと言ってくれた。

私がオランダ商館へ行くと、彼らは我々一同を親切にもてなしてくれて、ヤカトラ号の船長ウィルム・ヤンスゾーンはバタニ発六月一四日付のジョン・ブラウン君からの手紙を私にくれた。しかしそれは私の手許にとどく以前に誰かに開封されていた。内容はおジアンダー号のシャム到着についてであった。

ヤン・ヨーステンが江戸から平戸へ着いた。

七月一八日

アドバイス号から下船していた男が死んだ。安右衛門殿が駆け込んで来て、我々のジャンクのシー・アドベンチャー号が到着したと伝えたが、結局空騒ぎに終わった。

オランダ船の船長、指揮官、キャプテン・スペックスが英国商館に来て、スペイン酒一樽、大きなガラス瓶入りの焼酎、オランダのチーズ二個、バター入り小壺一個をみやげにくれた。ジョン・ベイリー君は私に相当大きな²⁸墓石を贈り物にくれた。

七月一九日

主膳殿は塩づけの木イチゴを一樽贈ってくれた。

七月二〇日

私はオスタウィック君に船員への支払いのため、および一部はイトン君に渡して諸掛りの払いにし、残り²⁹は他の時のために残しておくようにと丁銀三貫目を渡した。

支那甲必丹アンドレア・ディティスが来て珊瑚を買った。すなわち、

六番の枝五本

重さ三四四四分

一、四、五番の小枝二一本

重さ六六分

計

一〇〇匁四分

重さ一〇匁の珊瑚に対して銀一〇〇匁である。

金細工師から剣の吊り具の鉤二個と止め具一二個、及びちょうど三〇匁ある小銀塊一個を受け取った。

七月二一日

アドバイス号の船長トットン君は私に小盾一つとバタニの槍一對を贈ってくれた。私は彼に絹靴下二足、一足は私の赤色のもの、もう一足は以前ジュールジュ・ドゥロイスが送ってくれた緑色のもの、を贈った。

あるオランダ人船員が酔っぱらって一人の女を刺した。彼女が彼を自分の家に入れようとしなかったからである。

夜一〇時ごろエルナンド・シメネスが英国商館へ来て、キャプテン・アダムズ(三浦按針)が我々のジャンクでシャムから戻っており、その他にもう二隻のジャンクに積んだ品物が着いているという伝言をもたらした。

七月二二日

私は河内浦へゆき、ジャンクで到着したキャプテン・アダムズに会った。ジャンクを停泊地に曳くためのボートを連れて行き、曳航した。

⁽²⁹⁾ベンジャミン・フェアリー君からの手紙一包を受け取った。すなわち、

1 ジャンクの航海の経費一切の控。

2 シー・アドベンチャー号で輸送した商品の送り状。
 3 同船に積み直された商品の送り状。

4 キャプテン・庄兵衛のジャンクに積んだ商品の送り状。

5 エドモンド・セイヤーズの乗組んだキャプテン・魏官のジャンクに積んだ商品の送り状。

6 シヤムの川に沿ったアユチア発去る六月三日付の私あてのフエアリー君の手紙。

7 支那甲必丹アンドレア・ディティスの許へ彼の硫黄の代価として返される商品の送り状。

七月二三日

いくつかの事柄につき会議を聞いた。すなわち、

1 小型のシナのジャンクを買うか雇うかするのがよいと思われること。

2 できれば、シヤムから来た我々のジャンクを売却すること。

3 ウィルモット君を来航のジャンクの待機のため長崎へ行かせること。

4 商品を長崎に荷揚げし、平戸へ持ってくるより同地の確かな倉庫へ入れること。平戸より長崎の方が商売に都合のよい土地だからである。

5 藩主の番衆を一人頼んで船上に残してもらい、流言飛言を防ぐため、日本人が適正な賃金を取り、それ以上は取らないように見届けてもらうこと。

キャプテン・アダムズから、英国からニュー・イヤーズ・ギフ

ト号でもたらされた手紙を四通受け取った。すなわち、

「リチャード・コックス日記」試訳(四)(武田・森)

本社から、一六一三年二月一八日付、トーマス・スマス卿の一通
 同年同月一六日付、トーマス・ウィルソン君からの一通。

同年同月一六日付、弟ウォルターからの一通

スラット発一六一四年一月二〇日付、エド・ダズワース君からの一通

七月二四日

キャプテン・アダムズはシヤムから帰ったので、私に同行して藩主をたずねた。我々は次の贈り物を持参した。私から諸白二樽と鮭二尾、キャプテン・アダムズからシナの陶器の大皿五枚と鸚哥一羽。

しかし藩主は病中で床にいたので、話をすることはできなかった。

夕方おそく知らせが入って、オランダのジャンクが長崎へ着いたが、多くの人数が死亡しており、残りも弱って病気にかかり、平戸へ行きつくほどの人数がなくてやむなく同地に着いたということだった。これはシヤムから来航したオランダのジャンクである。

三五郎様(松浦信正)は昨日側女の一人が別の日本人と不義を働いたのを見つけてすぐさま手打ちにし、その後、男は刑場に引き出されて斬罪になった。その男の兄弟は、男を切った同じ刀で執行人に頭髮一かたまりを切られた。

七月二五日

大坂(あるいは堺)の宿主が運賃を得るために船をよこし、もし中央へ行くなら私を運ぼうと言った。ウィッカム君は我々の通

訳への手紙に、もし私が前もって船の用意をしていないなら、その船で私を中央に運ぶように計らったと書いてきたが、私には何の音信もなかった。

イートン君に大判二枚と重さ一八〇匁のブリアマン金を渡した。つまりイートン君に渡すようにとオスタウィック君に渡したのである。これは送り状にある商品の中に入れて中央に運ぶもので、大判は一枚五五〇匁である。

七月二六日

藩主は船員たちが自分の給与を受け取っているかどうか調べさせに、番衆を二人船上につかわした。彼らが、特に水夫長が、騒々しいならず者だからである。

エルナンド・シメネスが私に金細工師の作ったバンドのついた新しい帽子一個、金のふち飾りのある靴下止め一對、同様の華美な靴ひもをくれた。

七月二七日

平戸侯はこの日重体になり、その兄弟や重臣たち全員が大急ぎで彼の許へ馳けつけた。すぐあと藩主は伝言をよこし、体の具合がきわめて悪く、大砲の音が大変障りになるので、英蘭人双方とも病が癒えるまで発砲を見あわせてほしいと言ってきた。

神が順風と好天気とを恵み給うたので、我々は明日参府の旅に出発するため、すべての品を船に積んだ。

七月三〇日

ウィッカム君から手紙を受け取ったが、江戸へ出発する用意ができたので、自分の手紙を読み返す時間がなかった。キャプテン・

アダムズは私より先に乗船した。そして午後に出帆し、強い順風に恵まれてその夜名護屋に至り、静かだったのでそこに投錨した。

七月三一日

潮の具合がよかったので真夜中ごろ錨を上げ、午前中ずっと漕ぎ進んだ。しかしその後西寄りの強い疾風が吹いたので、夜おそく下ノ関海峡に至り、そこに投錨した。

注

- (1) 前回五月一六日以降の記事参照。英商館員イートンと肥後の日本人が、材木取り引きから争い、イートンが大村領雪ノ浦に拘禁されている。
- (2) 「大日本史料」一二編二六、六月二日コックスからイートンまたはニールソンへ、東邦に在る使備人より東印度商會に贈りし書翰三六六 Calendar of State Papers No.1121
- (3) tunic (= doublet) 一五一一七世紀の軽装の男子用上衣
- (4) duff (= dhooy) インド産木綿布、ドーティ(腰布)
- (5) 元和五年三月二九日在駿府の公家衆・諸大名を帰国させ、かつ遺物を賜う。「本光国師日記」等。
- (6) 「慶元イギリス書翰」岩生成一訳 駿南社 昭四(雄松堂昭四一復刊)一〇九。(以下「慶元」)
- (7) 「慶元」一〇九に記事あり。
- (8) 「慶元」一〇九に記事あり。
- (9) テンペスト・ピーコック Tempest Peacock は商館員

として広南におもむいた一六一四年に同行の英蘭人とともに殺害され、一説には交趾王のオランダ人に対する報復の巻き添えになったとも言われたが〔慶元〕五一参照〕、実際は彼の宿主の日本人が交趾の老王の側近と謀って殺害し、その金品をうばい、若い王子も関係したらしいことが、一六一七年同地におもむいた商館員エドモンド・セイヤーズ等の調査で明らかになった（一六一八年二月一日平戸発東印度会社あてリチャード・コックス書簡。Diary of Richard Cocks 二卷二九六頁）。交趾王は一五五八年～一六一三年太祖阮潢、一六一三年～一六三五年熙宗弘王阮福源。

- (10) 谷村三蔵、アダムズの航海記にも所載。
- (11) 家康は元和五年四月一七日に没す（発病一月一九日）。
- (12) 筑前国粕屋郡相ノ島、博多北方海上。
- (13) Cal. St. P. No. 1127. Eaton's letter to Wickham at Miako, June 22, 1616, Hirado.
- (14) Cal. St. P. No. 1124. June 22, 1616.
- (15) 瀬戸内海を支那船が航行してゐたことを示す好例。
- (16) Alferis Tuerto (= Alférez Tuerto) スペイン語で「片眼の旗手」。ムニョース・ベニテスと同様長崎のスペイン人。
- (18) single comberbandes (= cummerbunds) harer harerの意味は不明。
- (17) テーブル・ブック table book はO・E・Dの用例で「リチャード・コックス日記」試訳(四)(武田・森)
- (19) Silva, Don Juan de (一六一六・四・一九) は、一七世紀には手帳、メモ帳の類を意味するが、一九世紀には勘定早見表、装飾用書物の意にも用いられる。
- (20) スペインの植民地行政官、フィリピン群島長官兼高等法院長として一六〇九年マニラに着任。オランダ艦隊を撃破し、さらにモルッカ諸島に遠征してオランダ艦隊と交戦（一六一五年）、シンガポール海峡に進んだが一六一六年戦死。また家康に使者を派遣して国書と贈り物を呈し、鍋島勝重とも書簡をかわした。
- (21) 村山等安の台湾征伐の一三隻の内。前年一〇月三〇日、本年五月五日に記事あり。岩生成一「村山等安の台湾遠征と遣明使」台北帝大史学科研究年報第一輯参照。
- (22) Cal. St. P. No. 1134. Cocks's letter to Wickham at Osaka, Miako, or elsewhere. July 12, 1616. Hirado. 参照。
- (23) Adviz (= Advice) 号一六一七年にも来航。英船。Cal. St. P. No. 1137. Cocks's letter to Wickham at Osaka, Miako, or elsewhere. July 14, 1616. Hirado.
- (24) Brouwer, Hendrick スペックスの前任の平戸オランダ商館長。在任期間一六一三年二月～一六一四年九月。Jaatra号。蘭船。一六一五年にも来航。Cal. St. P.

No.1140 Cocks's letter to Wickham, July 15, 1616.

Hirado.

(25) Black Lion (=Zwarte Leeuw)号。蘭船。翌年再び来航。

(26) デンマーク王はクリスチアン四世(一五八八—一六四八)

(27) ブルート王 Brute 伝説上のブリテン国の最初の王、トロイア人ブルータス。トロイアの移民をブリテンに導き、トロイノバント(ロンドン)を建設した。

(28) 養石 bezoar 羊などの体内結石。解毒剤として用いられた。

(29) Fary, Benjamin シヤム商館長。

(30) New Year's Gift 号。一六一四年二月英国を出帆、一六一四年一〇月スワリ着、一六一六年六月帰国。指揮官ニコラス・ダウントン。

(31) Cal. St. P. No. 1138. July 14, 1616

付記

岩生成一教授のご指導によるこの試訳も本稿で四回目を迎えることができたが、諸般の事情により本誌での発表は今回で一応終了することになった。

この仕事の続きはいずれ別のかたちで世に問うことにしたい。

長い間ご指導下さった岩生成教授はじめ、藤島昌平工学院大学教授、松浦規氏、檜崎豊市猶興館高校教諭ほかの方々に対し、ここに厚くお礼を申し上げる次第である。